

黒ギャルR子ちゃんの

ハメパコ日記!



黒ギャルR子ちゃんのハメパコ日記！～第2章 中年オヤジとの援交～

著・霜降りカイロ

多くの人が行き交う駅前。夜の8時を回っている為、帰宅途中のサラリーマンやOL等のスーツ姿が目立つ中、ラフな私服を着ている若者の姿もある。夜の街に歩く若者という点は素行の悪さということで、警察や大人も目をつむる程度で済ますだろうが彼女の場合は違っていた。

大胆に着くずした制服に、露出し艶やかな黒い肌はネオンの光を浴びて反射する。駅前のベンチに座ってスマートフォンを片手に弄っている彼女は何者だと言うのか。

彼女、本城蘭子はスマートフォンの画面に視線を落としていたが自分の前に影が落ちたことで顔をあげた。

彼女の前に立っていたのはスーツを着た中年の男。禿げ上がった頭髪を撫でつけ何とか体裁を保っている頭に、スーツで隠し切れていない脂肪の付いているでっぷりとした腹。そして顔は皮脂のテカリによって微かにネオンの光を反射している。

明らかに女子高生の蘭子と接点がないであろう事は明白だ。道行く人々は向かい合う中年の男と女子高生のチグハグさに眉をしかめるも自分の事へ戻っていく。言い換えるなら、この程度、この周辺ではよく見られる光景だからだ。

「やぁ。お待たせ蘭子ちゃん」

「も～、おじさん遅いって！ もうちょい遅かったら帰ろうかと思ったし～！」

「ごめんよ蘭子ちゃん。部下がヘマをしてねえ……その尻拭いをさせられてたんだよ」

「ふ～ん……おじさんケツコーお偉いさんだもんね」

「いや、そんなに大したものじゃないよ」

ニやつく中年の視線は蘭子の太腿や胸元へと注がれる。普通、ここまで露骨な視線を向けられれば嫌悪感が湧き出るものだが、蘭子の顔に浮かぶのは艶かしい笑みであった。ベンチから立ち上がると蘭子は中年の男の腕を取った。

脂ぎった体に漂う加齢臭。華の女子高生なら抱き着こうなどと思わないだろう。だが蘭子は全く気にしない。加齢臭を臭いと思えどそれは蘭子の興奮を沸きたてるスパイスでしかない。

「おじさん。それじゃあホテル、行こっか♡」

駅から離れた繁華街にあるホテルの一室。扉を開けて玄関があり、部屋に続く廊下の横には擦りガラスで覆われた扉がある。そして廊下を抜けた先にある部屋は清潔感のある白い壁紙で覆われている。壁際の棚の上にテレビが置かれ、中央にはキングサイズのベッドが鎮座していた。

玄関でローファーを脱いだ蘭子は背後を振り返った。そこには扉を閉めて革靴を脱いだ中年の男がおり、扉に鍵を掛けて蘭子の方に向くともう我慢できないと言わんばかりに、ギラギラと欲望の炎を灯した目で蘭子の体を舐めるようにねめつける。

股間部は膨らんでおり男の興奮が高まっているのは誰の目から見ても明瞭であった。

「らっ、蘭子ちゃん！」

「おじさんヤバすぎ〜！ マジで発情してんじゃん！ チンポバッキバキに膨らませてさあ……早く脱いじゃいなよ……♡ おじさんも、チンポも、苛めてあげっからさ♡」

「はあ！ はあっ！ 蘭子ちゃん……！ は、早くおじさんのチンポ苛めてくれ！」

「じゃあ……ズボンもパンツも脱いでチンポ出せよ。へ・ん・タ・イ親父♡」

蘭子は中年の男の膨らんだズボンの部分を鷲掴み、上下にゴシゴシと扱いて行く。その手つきは明らかに快楽を与えるものであり、中年の男としてはたまったものではない。パンツとズボンによって押し込められている陰茎は完全に勃起しており、微かな痛みを男に与えていた。だが蘭子の手コキによって更に膨張の兆しを見せる陰茎はズボンの中で爆発寸前であった。

「会社じゃ偉ぶってるくせにさあ！　ウチみたいな小娘にチンポ苛められて気持ちよくなりたいとかマジで変態っしょ！　ほら！　さっさと脱いで粗チン見せろって！」

「は、はい！」

中年の男はいそいそとズボンのベルトに手を掛けて脱いでゆく。脂肪によって太い中年の男の指ではベルトを外すのに時間がかかる。その間にも蘭子は股間の膨らみを巧みな手つきで摩っていった。勢いよく、しなやかな指を一本一本動かして快楽を与える蘭子。その手の動きに合わせて男の息は荒くなっていく。

まず、男の手によってズボンが脱げていく。脂肪が震え毛深い体毛で覆われた足の内側に蘭子の手が伸ばされた。その手は太く体毛に覆われた醜い足の上を這う。そのゆっくりとした動きは焦れたくて、だからこそ強い快楽を求めてしまう。

男は太腿の内側を這う手の体温と感触に痺れながら、次なる期待を抱いてだらしなく口を緩ませて舌を出した。まるで犬のようにはしたない姿だった。中年の男が犬のように舌を出し、快楽に身を震わせているというのは恥であろうがこの場に居るのは男と蘭子だけ。

「蘭子ちゃん、チュウ……チュウしようよ」

「いいよ♡　加齢臭ムンムンのおじさんとお……キス、したげる♡」

蘭子の男好きそうな顔と中年の男の顔が接近し、ブチュッと粘着質な音がして唇が合わさった。

中年の男は蘭子の可憐な桜色の唇を吸い尽くそうと、大きく口を開けて乱暴で独り善がりの口づけを交わすも、蘭子も負けじと男の舌を唇で吸って舐めしゃぶる。粘着質な音が玄関で鳴り、クチュクチュと二人の口元から音は絶えない。

加齢臭が漂い、じっとりと汗ばむ体を蘭子に押し付ける男。誰であっても嫌悪感を催す男の行動だが蘭子は愛おしい恋人を相手にするかのよう情熱的に抱きしめた。男の体は太く蘭子の腕では抱きしめきれない。

「ンフー！　ンフー！　蘭子ちゃんとお……！　ブチュっ！　ヂュルルっ！　女子高生とチュウっ……！」

「おじさあん……ちゅる、チュッ！ あむ、しちゅ……キスめっちゃ激しいし～、それにい……ちゅっ……息くさ～い♡」

「ご、ごめんよ蘭子ちゃん！ でも、蘭子ちゃんの言いつけ通り三日間体洗わなかったんだよお～……デュルルッ！ ジュルッ！ ブチュルッ！」

「マジで守ったとかウケる～！ ちゅっ！ あむっ……ちゅるる！ チンポもバッキバキにしてさあ……デュルル！ チンポも洗ってない？ 金玉にザーメン溜めてきた？」

「溜めたよ！ 夜に毎回限界までオナ禁したっ！ だから、早く射精させてよ！」

抱き合う二人。中年の男は盛りついた動物のように腰を振った。男の勃起した逸物は蘭子の太腿の内側に挿入してカクカクと小刻みに腰を振った。むっちりとした黒い肌の太腿の内側に入り込んだ醜い肉の塊は先の割れ目から透明の汁を垂れ流し続けていた。

透明な汁は黒くむっちりとした蘭子の肌に浸透していく。加齢臭を発する中年の男の体から分泌された粘液。ベトベトで、濁って見えさせるそれが黒い肌の上を滑り、潤滑液となって男の腰振り運動を加速させた。

「蘭子ちゃん～もう！ もう！ 射精するよ！ 黒ギャル蘭子ちゃんの体におじさんの精液ぶっかけるよ！」

「マジで？ もう射精するとかウケる～！ 早漏とかそういうレベルじゃないし～！ どんだけ射精したいんだって話！ 出ちゃう？ 中年オヤジのなんの使い道も無いオナニーで出すだけの汚ったないチンポミルクみっともなく出しちゃう？」

真正面からの罵倒。中年の男からしたら自分の半分も生きていない小娘に煽られ、罵倒されるなど怒りだけで済むはずが無いというのに、男は口からだらしなく舌を垂らして腰を振り続けた。

陰茎は本来挿入すべき女性器には無く、自分勝手に快楽を貪る為に黒い肉の間に納まっていた。むっちりとした肉の詰まった蘭子の太腿だが脂肪だけではなく、脂肪の下に筋肉がしっかりとついており肌には瑞々しいハリツヤが宿っている。弾力と柔らかさを兼ね備えたその太腿は手で撫でて感触を味わっているだけでも涎が垂れてしまう極上の物。

「あ～！ 出る出る出る！ おじさんチンポから精液出るよ～！ んぢゅるる！ レチュレロオ……デュルルッ！」

男は蘭子の唇にむしゃぶりつき、自身の先走りによって濡れた蘭子の太腿相手に快楽を貪っていた。腰を降ることで男のだぶつく脂肪が波を打つ。男が腰を振り、蘭子の体とぶつかることで肉の合わさる音が鳴った。

微かに汗ばむ二人の体。蘭子の黒い肌がじっとりと汗ばむことで吸着が生まれ、陰茎に肉が絡みつく。ピッチリと閉じられた蘭子の太腿は汗によって十分な湿り気を帯び、陰茎からの先走り汁が合わさることでそこらの女の女性器以上の快楽を男に与える肉の穴ボコとなっていた。

「デュルル！ チュルッ！ れろお……ちゅ♡ ほら出せよ変態オヤジ！ 腐れチンポの先っちょから使い道のない汚ったないチンポミルク吐き出せよ！」

「あっ！ あっ！ あっ……おほお♡ 出るっ……せーえき出るう♡ あっ、ああああ♡」

ただただがむしゃらに腰を振り、快楽を求めるだけの生き物になっていた中年の男はびくりと震え亀頭を蘭子の太腿の内側に埋めながら射精した。閉じられていた黒い穴ボコの中から粘着質で嫌悪感を催すような音が鳴る。その音は蘭子の体を伝って内側を走り背筋を、脳髄を震わせた。

蘭子の体勢では見えないが、肌の上を這う粘着質な白濁の精液は所々ダマになっている感触がある。もしかしたら古い精液がたまりそれが吐き出されたことで黄ばんでいるかもしれない。そして離れた場所に吐精されたにもかかわらず芳しくも生臭い性臭が蘭子の鼻孔を犯す。そして牝の本能を揺さぶり下腹部をカッと熱くさせる。

「あ〜あ……汚ったないチンポミルク射精した。マジで臭いし……どんだけ金玉にザーメン溜めてたわけ？ しかもウチの太腿ベツベツにしてさあ、ちょっとは申し訳ないとか思わないの？」

「あっ……ご、ごめんよ蘭子ちゃん！ おじさん何日もオナ禁してたから我慢できなくて――」

「言い訳とか聞きたくな〜い！ これはお仕置きがタツプリー必要みたいだねー。んじゃ、騷のなってないワンちゃんはどうやって騷けようかなあ……っと！」

「ヒィっ！！」

蘭子は中年の男のある部分を握った。体を伝う痛みにたまらず男は悲鳴をあげたが、それと同時に走った気持ち良さに期待の声を口にしてしまう。

蘭子が掴んだ部分は男の局部、つまり陰茎であった。射精したことで軽く萎んでいる陰茎だが蘭子の手で包まれたことでビクンと反応を返す。蘭子のしなやかで柔らかく温かい手は、敏感な陰茎を優しく包み、精液で汚れることを気にせずに所構わず撫で回す。

蘭子は一度、男の唇にキスをして陰茎を掴みながら玄関を歩き廊下の先へと先導した。すでに靴は脱いでおり床の上を歩くのに支障はないが男は爪先立ちとなって歩く。陰茎が上を向くように、引っ張られていることで痛みが走る。それを避ける為に中年の男は贅肉で重い体に鞭打って爪先立ちとなって歩いていた。